

## 創世記 5 章に登場する 10 人の名前が意味するもの

### はじめに

●アダムからノアまでの 10 代にわたる族長たちは、エノクを除いて、皆一様に、長生きした人たちでした。長寿は聖書では神からの祝福であるとされています。箴言 3 章 1~2 節には、「わが子よ。私の教えを忘れるな。私の命令を心に留めよ。そうすれば、あなたに長い日と、いのちの年と平安が増し加えられる。」と約束されています。アダムは 930 歳まで生き、なんと 9 代目のレメクが 56 歳の時まで生きていました。まさに、神の大家族です。ヘブル的視点から聖書を理解する場合、名前の中に隠されている意味を知ることが重要です。しかも、その名前はすべて御子を啓示する言語なのです(ヨハネ 5:30~40)。

### 1. アダム אָדָם

●主なる神は土(ハ・アーダーム)のちり(アーファール)で、ご自身の形に似せて、人(アーダーム)を形作り、鼻からいのちの息(ネシャマー)を吹き込むことで、人は生きる者(ネフェシュ・ハーヤー)となりました。人は他の動物などとは違い、神にとって、特別な存在として造られました。つまり、人間は神様の永遠の愛の交わりの中に生きるように造られたのです。神と人とはひとつでした。

●聖書は人間のことを「アダム」と言います。それは**土のちりで造られた**からです。「ちり」とはとてもはかないもの、吹けば飛んでしまうようなはかないものから造られたことを意味します。ちなみに、ギリシア語の「人」はどんなことばで現わされるかと言えば、「アンスローポス」(ανθρωπος)ということばです。意味は、「上を向く者」という意味です。それは信仰をもって神を見上げるという意味ではありません。自分にとって価値あるものをひたすら求める者という意味です。真・善・美における最高の価値あるものをひたすら求め続ける者、それがギリシアのヘレニズム的人本主義の人間観です。ところが、旧約のヘブライズムの人間観は神本主義です。つまり、**人(アーダーマー)人は神によってしか生きられないはかない存在、すべてを神により頼まなければ生きていない存在**だという考え方です。ちなみに、日本人の人間の考え方はどうでしょう。日本語の「人」という字は、互いに助け合って生きなければ生きていけない存在という意味になります。ですから、人と人との関係をとて大切に、また気にします。「おかげさまで」という言い方はその考え方を代表しています。

●「人間とはなにか」、「人とは何者なのでしょう」—このことひとつとっても、世界にはいろいろな考え方があるのです。私たちは神の書かれた聖書に基づく考え方を正しく理解し、次の世代に伝えていく責任があります。今回、創世記 5 章から、10 人の名前を覚えしました。その中で一人だけ死ぬことなく天に移されたエノクを除く、9 人のすべてが長生きなのです。それは神様が彼らを祝福したからです。これは特別な祝福であったことを信じましょう。やがて、キリストの地上再臨の後に千年王国が到来します。メシア的王国がこの地上に実現します。そこでは、千年近く生きる者たちが数多くいることでしょう。創世記 5 章の系図はそのことも示唆しているかもしれません。

●ちなみに、主は人であるアダムを、東の方エデン(עֵדֶן)という名の園を設け、そこに人を置かれました(אָדָם)。 「エデン」は「豊かな水があるところ」という意味です。人がエデンの園に置かれるまでの地は、2 章 5~6 節にあるように、「5 地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それ

は、神である【主】が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。6 ただ、水が地から湧き出て、土地の全面を潤して」いました。「水が地下から湧き出て」というのは、土地(アーダーマー)の全面を洪水のように覆っていたからでした。それは、地下から豊かに湧き出で来る水を適切にコントロールする「人」がいなかったためです(津村俊夫)。人が造られてはじめて水をコントロールでき、2章 10~14 節では、一つの川がエデンの園を潤し、そこから四つの川が流れ出て、地の全面を潤していたとあります。エデンの園は他よりも高い位置にあったとも考えられます。その場所に主は人を置かれた(קִינִי)のです。そしてそこを耕させ、守るようにされました。土地のちりで造られたアダムですが、地を治める統治権を神から与えられたのです。

●神である主はエデンの園に見るからに好ましく食べるのに良い木をたくさん生えさせ、園の中央には「いのちの木」と「善悪の知識の木」を生えさせました。特に、「善悪の木からはとって食べてはならないこと」を神はアダムとエバに教えました。「食べると死ぬ」と言われたのです。この神のことばの意味を、彼らはよく理解できなかったと思います。なぜなら、「死」ということを経験したことがないからです。

●アダムとエバは蛇にだまされて、神から食べてはならないと言われた「善悪の知識の木」の実を取り、食べてしまったことによって「善悪」を知るようになり、同時に、死が自動的に入り込みました。その結果、ひとつであった神と人の間に死という隔たりが出来、地を支配する権威は喪失し、さらにエデンの園から追い出されてしまいました。

●アダムとエバは「いのちの木」からは一度も食べてはいません。それを食べると永遠に生きるとありますが、エデンの園から追放された人間にとっては、いのちの木がどういうものか、全く目にするのできない木となっていました。しかし、やがて千年王国の後に到来する「新天新地」になって、第二のアダムによって、はじめてこの「いのちの木」の実を味わうことになるのです。以下の聖句はそのことを教えています。

黙示録 2:7「勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」

黙示録 22:2「川の兩岸には、いのちの木があって、12 種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。」

●罪を犯す前の人間は善(トーフ、טוֹב)の世界しか知らない存在でした。「善悪を知る木」と言われても、トーフではないもの、つまり、悪(ラア、רָע)のことを聞いても、アダムにとっては理解できなかったはずです。「善と悪を知ることによって、あなたがたは死ぬ」と言われた神のことばには、とても深い意味があるのです。

## 2. **セツ** **שֵׁט**

●セツは、カインがアベルを殺したので、神が彼(カイン)に代わる子を授けられました。「セツ」(שֵׁט)は「置く」を意味する動詞「シート」(שִׁיט)から派生した名詞です。カインの系譜(おそらく長寿ではなかったと思われます)は完全に神から離れて行きました。それゆえに、神のご計画を担う人の(系譜)が必要となったのです。そこで与えられたのが「セツ」でした。彼はアダムが 130 歳の時に与えられた子です。

●セツは、神のご計画を実現するために、アダムとエバの二人の息子に代って与えられた(授けられた)子です。それは、涙と悲しみの家となってしまったアダムの家庭において、「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい」(詩篇 127 篇 1 節)とあるように、カインの悪の系譜には染まらない、神の使命を新たに担う者として生まれたのです。つまり、神によって、アダムからセツにつながれたことを意味します。聖書は「アダムは 130 歳になって、彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ」と記していますが、「彼のかたちどおり」とは、本来の人間が創造された目的にかんがって、ふさわしい存在という意味であり、神と親しく交わる

存在として授けられたということです。

●ちなみに、「セツ」は、「代わりの子」という意味と同時に、「基礎」とか、「土台とされた者、固定された者」という意味があります。それは、やがてアブラハム・イサクの系図において登場するイエス・キリストが、ヨセフの種からではなく、マリヤによって、しかも聖霊によって誕生する「**代わりの子**」を象徴しています。つまり、**第二のアダム**であるイエス・キリストという土台(基礎)から、神の子どもが誕生することを予告しているのです。

### 3. エノシュ עֲנוֹשׁ

●「エノシュ」は、アダムと同様に、「人」を指す名詞としてしばしば用いられます。しかもそれは「弱い人」を意味します。「いやしにくい、直らない」を意味する「アーヌーシュ」(אֲנוּשׁ)を語源としています。罪による死の現実に、人類として初めて主の御名を呼び求めたのもこのエノシュが誕生してからでした。「御名を呼び求める」行為は、神との人格的なかわりを意味することですが、その背景にはエノシュの父であるセツの信仰告白が込められています。またこの「主の御名を呼び求める」ことは、アダム、セツ、エノシュの系列が、神への礼拝を共同体として確立されたことを伺わせます。カインの系列の者たちがますます自分たちの知恵と力に頼ろうしていく時代において、セツの系列は神に立ち帰り、へりくだって、神を神として礼拝する道を確立していったと考えられます。

●「エノシュ」の名前に込められた意味は、**人間が自らの力で救い得ない人間の弱さ**です。罪による死が支配する現実の中で、死を恐れて生きる人間の弱さを象徴しています。御子イエスの受肉は、まさにそうした人間の弱さをまとわれたことを意味しています。

### 4. ケナン קֵנָן

●エノシュの子であるケナンについては、聖書は何もコメントしていません。しかしこの名前の語源である動詞の「カーナン」(קָנַן)は、「巣を作る」「巣籠りをする」という意味です。巣を作るとは、家庭を大切にし、与えられた子どもを大切に育てることを意味します。それは、主の御名を呼びながら、主を信じる信仰を次の世代にしっかりとバトンタッチすることを、自覚的な使命とすることを意味します。

●「巣を作る」「巣籠りをする」という意味は、「**主にとどまる**」、「**主の家に住む**」ことでもあります。これは、神のいのちを豊かにしていく信仰的決意です。しかもそれは御子イエスのゆるがないライフスタイルでした(ルカ 2:49)。またそれはダビデの霊性でもあります(詩篇 23:6、詩篇 27:4 参照)。

### 5. マハラルエル מְהַלְלֵאֵל

●次のマハラルエル(「マハラエル」という言い方もします)という人についても、聖書は何もコメントしていません。しかし、名前を良く見るとどういふ人が分かってきます。最後の「エール」(אֵל)は「神」を表わします。頭にある「MEM」(מ)という文字は、動詞を名詞にするときに使います。残りの文字は動詞の「ハールル」(הִלָּל)となります。みんなが良く知っている「ハレルヤ」の「ハレル」です。「たたえる、賛美する」という意味です。ここでは「ハレル・ヤー」ではなく、「ハレル・エル」ですから、「神をほめたたえる」となり、それ

を名詞にすると、神への称賛、神への賛美という意味になります。

●おそらく、マハラルエルの父ケナンは、自分自身が主にとどまることを通して、また、主から与えられた子どもを大切に育てることへの使命感から、子どもに、「神へ称賛」、「**栄光在主**」という意味の「マハラルエル」としたのだと思います。これは、御子イエスの生涯がまさに神に栄光を帰すことを予告しています。

●神への賛美の中に、主の栄光(シャハイナ・グローリー)が現わされます。 賛美は単に歌うだけでなく、神様をもっと近くにお招きするとともに大切な行為です。それは神への礼拝において必要不可欠な聖なる香りであり、私たちの思いや願いをはるかに越えて、予期せぬ神のみわざを起こさせていく源泉となります。

## 6. エレデ יֵרֵד

●次のエレデについても特別なコメントはありません。しかし、この「エレデ」の語源は「ヤーラド」(יָרַד)で、「高い所から下に降りて来る」という意味があります。「神を賛美し、神に栄光を帰した」結果として、神が上から下に降りて来られることを意味します。ある人は、このエレデに「下る、降り行く」という意味があることから、それは墮落することだと解釈する人もいます。しかしエレデはとても長生きしていることから考えるならば(これまでの最高齢の 962 歳)、また、長寿が地上で受ける最高の祝福であることを考えるならば、その否定的な解釈は妥当とは言えません。むしろここでの「下る、降りて行く」という意味は、「**へりくだること**」(謙遜)を意味していると言えます。父のマハラルエルの名前が、神への賛美、神の栄光を示唆しているとなれば、神の栄光は、神のへりくだりを通して現わされると解釈できます。

●事実、神の御子がイエスとなってこの世に生まれたとき、御使いたちは、当時の羊飼いたちに現われました。その御使いととも降りてきた天の軍勢(御使いの軍勢)は、「いと高き所に、栄光が、神にあるように、地の上に、平和が御心にかなう人々にあるように」と賛美したように、神の御子が天から地上に人となって降りて来られたクリスマスの出来事は、御子イエスが、その生涯をこの地上でへりくだって御父の栄光を表わされることの予告でした。 御子イエスは自分の考えや自分の行いではなく、すべて御子が語る事は御父の声であり、すべてなされることは御父の心だったのです。こうしたエレデの信仰は、次のエノクに引き継がれていきます。

## 7. エノク עֲנוֹךְ

●「エノク」は、ヘブル語で「ハノーフ」(עֲנוֹךְ)で、「**献げられた者**」という意味です。父エレドの謙遜な生き方は、自分に与えられた子どもを神にささげることでした。アブラハムが自分の子「イサク」をささげようとしたようにです。これは、御子イエスが私たちの罪の身代わりとしてささげられることを予表しています。

●創世記 5 章では「死んだ」ということばが 8 回使われています。しかし、ひとりだけ、死ななかつた人がいます。それが 7 代目の「エノク」です。「エノク」は、これまでの先代の父にはなかつた特筆すべき点がありました。彼は聖書の中で初めて「**神とともに歩んだ**」人でした。しかし、彼の息子の「メトシエラ」が生まれるまでは、神とともに歩んではいながつたようです。では、自分中心の生き方をしていたのかということもありません。創世記 5 章にはこのエノクと 10 代目のノアの二人だけが「神と共に歩んだ」と記されています。

●これどういうことでしょうか。「歩む」という動詞のヘブル語は「ハーラフ」(הָלַךְ)ですが、ここでは「ハーラフ」のヒットパエル態(再帰態)が使われています。それは、自発的に、主体的に、自覚的に神とともに「歩む」ことを意味しています。彼をしてそうさせたのは何なのでしょう。それは、彼の息子の名前を「メトシ

エラ」としたところにヒントがあります。

## 8. **メトシェラ** **מֶתוּשֶׁלַח**

●エノクが「神とともに歩む」ようになったのは、息子が与えられた時に、神からの啓示を受けたからだと考えられます。つまり、エノクが息子の名を「メトシェラ」と名づけたのは、その**息子が死ぬときに神のさばき** **が来る**という啓示を受けたからです。そのことを知った時から、エノクは「神とともに歩む」ことを始めたのです。エノクはやがて起こる終末の出来事を、絶えず意識しながら、生きる人々の模範的存在です。

●「メトシェラ」という名前は、「死」を意味する「ムート」(מוֹת)と、「遣わす」を意味する「シャーラハ」(שָׁלַח)の動詞が結びついた名前です。このメトシェラが10人の中で最も長生きした(969年)のには理由があります。その長寿の理由とは、ひとりでも多くの者が神のさばきによって滅びることのないようにという神の愛の配慮のゆえです。

## 9. **レメク** **לֶמֶךְ**

●アダムの最初の息子であったカインは、弟のアベルを殺してから、神を信じないで、自分の力を信じて生きる者となって行きました。そのカインの系列の中にいる人々が長生きしたという記録は一つもありません。そのような記述が全くないということは、逆に、創世記5章の人物の長寿は特別なものであったということをも物語っていると考えられます。

●カインの系列の中にもエノクとか、これから取り上げるレメクという名前があります。それは「強い者」を意味します。カインの系のレメクの父の名前はメトシャエルです。セツ系のレメクの父の名前はメトシェラで、両者はとても似ています。しかしその生き方は真逆です。カイン系のレメクは、自分や自分の仲間が受けた傷のためには、77倍の復讐をするという恐ろしい人でした。なぜなら、死への恐れが人一倍強かったからです。ですから77倍の復讐をして、自分の生存と防衛の保障をはかったのです。カイン系のレメクは、神から離れて自らを強い者と自負する者でした。

●一方のセツ系のレメクは、父メトシェラを通して、神のさばきはやがて来ることを知っていました。人間の罪深さが神を怒らせ、そのさばきを免れ得ないことを知ったレメクは、自分の息子をノアと名付けました。なぜなら、そこに神の慰めを見出したからです。父レメクが自分の息子の名前を「ノア」としたのは、「主がこの地をのろわれたゆえに、私たちは働き、その手で苦勞しているが、この私たちに、この子は慰めを与えてくれるであろう」と一縷の望みを息子のうちに見たからです。これは、長い間、イスラエルの救いを待ち望んできた老イメオンがエルサレムで幼子のイエスを抱いたとき、そこに救いの全貌を見たのと似ています。つまり、セツ系のレメクは、地上の環境がどうあろうと、**神の慰めを待望する「強さ」**をもった人物の代表と言えます。

## 10. **ノア** **נֹחַ**

●父レメクは息子のうちに、神の慰め(=救い)を見たのです。「ノア」の語源は、「ヌーアツハ」(נוֹחַ)です。「安息、休息、慰め」を意味します。類義語の動詞「ナーハム」(נָחַם)のピエル態は「慰める」という意味で、それは「救い」と同義です。ノアは神から大洪水による神のさばきを信じて、そのさばきから免れる箱舟を造りました。周囲の人々の嘲笑にもかかわらず、ノアは自分の家族に対して信仰的なリーダーシップを取っていま

す。そして信仰によって箱舟を造り続けたのです。ノアは**メシアの到来による新しい神の支配(天の御国の成就)**を象徴している名前と言えます。

●創世記 5 章の中には、名前の記されていない多くの人々が存在しています。アダムの息子はセツだけでなく、セツの後にも多くの息子や娘たちが生まれています。セツもエノシュだけでなく、彼の後にも息子と娘たちが生まれています。ですから、時代とともに多くの子孫がいるのです。ところが最後は、ノアとその妻、そして三人の息子たち(セム、ハム、ヤペテ)の三人とその妻たちの 8 人しか神のさばきとしての大洪水から救われる者はいませんでした。信仰継承の難しさを知らされると同時に、今日、真剣な取り組みが迫られているのです。